

ふね遺産 第1回 応募案件-5

「ふね遺産」(応募様式): 実船計測用コンテナ

平成28年12月 氏名: 平山次清

所属: 横浜国立大学

メールアドレス: hirayama-tsugukiyo-nr@ynu.ac.jp

その他の連絡先: 090-4827-5184

20170206 資料追加記載

	内容	備考
1. 対象物・資料の名称・所属または所有者、	<ul style="list-style-type: none"> ・名称: 実船計測用コンテナ ・所属: 横浜国立大学 (海洋空間のシステムデザイン教室) 	YNUミュージアムに展示(但し実物はキャンパス内(屋外))外見の見学は可能
2. 対象物の作成・存在時期	昭和46年頃、20フィートコンテナ内部を改装して作製された。ブリッジからのリモコン操作可能。船体運動・加速度・船首変動水圧・衝撃水圧・軸トルク等を計測するとともに、投棄式波高計による波高計測やレーダーによる波向計測を行った。	造船研究協会SR第125研究部会(大型超高速船の開発に関する研究、昭和46年度~49年度、部会長中村彰一(大阪大学)、副部長竹澤誠二(横浜国立大学)にて理論・実験・実船計測がなされた。実船計測小委員会は主査竹澤誠二(横浜国立大学)ほか32名の委員が参加して実施。
3. 現状 (写真添付)		現物はキャンパス内であるが、屋外保存であるので、痛みがある。塗装などで修復はしているが、経費の問題がある。中の機材を設置する棚などは当時のままであり、機材もパーティカルジャイロやアナログデータレコーダなども残っている。但し保守はしていないので作動は不可。
4. ふね遺産認定基準の該当項目	<p>【認定対象】(2)(4)</p> <p>【認定基準】(1)(4)(8)(12)</p>	
5. 歴史的・工学技術的意義	昭和40年代、日本の造船界の発展を技術的な側面(実海域での計測による理論検証)から支えたもので、当時としては画期的なものであり歴史的・工学的な意義が大きい。コンテナ船だけでなく、プラントバージのアマゾン曳航の際にも使用された(右)。 	 <p>今でこそ小型高性能の機器があるが、当時の実船計測記録システムとしては、計測コンテナに多くの計測器材を詰め込み、オール・イン・ワンとしてコンパクトに計測できる世界初のものであった。</p>
6. 参考資料・文献 (本表に収まらない場合は別途添付する)	<ul style="list-style-type: none"> (1) YNUミュージアムの説明資料(添付) (2) 解説記事(竹澤誠二: 実船試験用計測コンテナシステム(その1~4)、船舶、Vol.48No.4・No.5(1975)) (3) 平山次清: 第2章・実船計測技術の開発史、運動性能研究会モニタリングシンポジウム(2015) (4) SR125:PSW 航路コンテナ船実船試験データ集、造船研究協会(1971) (5) SR-125: 超高速コンテナ船の耐候性 	<p>に関する研究、造船研究協会、研究資料、NO.171(1973)</p> <p>(6) 竹澤誠二・梶田悦司: 実船試験結果と予測値の対応、第2回耐航性に関するシンポジウム。日本造船学会(1977)</p>